

青年期女子の孤独感および独自性欲求が 被服志向性に及ぼす影響

——被服志向性における同調の二面性に着目して——

安 立 奈 歩*

Effects of Loneliness and Need for Uniqueness on Clothing Orientation in
Female Adolescents

—Focusing on Duality of Conformity in Clothing Orientation—

Naho ADACHI

I. 問題・目的

1. 青年期女性における被服の心理社会的意味

大学入学直後の女子大生が、「大学は制服がないので、毎日何を着ていいか悩みます」とこぼすのを耳にする機会は比較的多い。手持ちの服が少ないという経済的物理的要因もあるのだろうが、自我同一性の確立 (Erikson, 1959) の時期と相俟って、制服という形で当然のように周囲と同調する被服行動のあり方から、突如自分らしさを突きつけられるあり方へと変容を迫られる、心理社会的要因をも反映した体験なのであろう。

神山 (1996) によれば、被服行動によって、他者に呈示する自己像を操作したり、人間関係を促進あるいは抑制したりすることができ、自分自身に対しても、身体像や自己像を確認、強化、変容することができる。被服行動の個人的な傾性は「被服志向性」と呼ばれ (藤原 1986, 他)、研究者の切り口によって様々に定義づけられてきた。

雪村・今岡 (2002) によれば、「人々の着装行動は集団への適応行動」であり、Simmel, G. (1904) 以来言及されるように、ファッション採用は、自分の所属する集団と調和をはかりたいという「同調欲求」と、自分の所属する集団内で他と自分を区別したいという「差異化欲求」の両者を同時に満足させる行為である。Eriksonの自我同一性が自己斉一性・連続性、時間的な連続性と一貫性という“対自的側面”と同時に、帰属性という“対他的側面”もが含まれる概念である点を踏まえると、青年期における被服志向性は、青年期の発達課題との関連で考えることができよう。すなわち、周りの素敵な子と同じようなおしゃれをしたいといった「同調欲求」と、流行のファッションを身に着けて周りに差をつけたいといった「差異化欲求」の揺れは、まさに自我同一性確立の際の、かけがえのない

* 椋山女学園大学 人間関係学部 心理学科

自分の自覚と他者に承認されることの両立を目指す志向性と、パラレルであると考えられる。

本研究では、青年期における被服志向性を、自我同一性の確立を目指す上での「同調欲求」と「差異化欲求」のせめぎ合いの表現である、と捉える。また、女性にとって、容姿に対する満足度は自己概念の中でも重要な位置を占め、牛田（1999）によれば若い女性は身体に対してかなり不満を持つことから、本研究では青年期女子を対象として、被服行動の心理社会的意味を検討する。

2. 被服志向性における同調の二面性

近年、ファッション雑誌やテレビに登場するモデルやタレントがいわゆる“ファッションリーダー”となって、若者に個性的なファッションや流行のファッションを提案している。ここで若者の心理は同調と差異化をめぐり、どのような動きを見せるのであろうか。

川本（1981）によれば、早い時期にファッションを採用する人ほど差異化欲求が強く、遅い時期に採用する人ほど同調欲求が高い。先の雪村・今岡（2002）の調査からは、男性より女性において差異化欲求の強さがファッション採用に影響することを明らかになった。これらの知見を踏まえ、本研究では差異化欲求について、流行を先取りし、おしゃれで人目をひくファッションを採用することで他との差異化を見出そうとするという志向性を持つという意味で、「差異化志向」と名づけることとする。

一方、同調に関してはどうであろうか。同じ流行を採用するにせよ、遅い時期に採用する場合は同調の志向性が強まる（川本，1981）ため、おしゃれをしたい場合でも、斬新さより無難さが前面に出ることもある。一方、おしゃれへの意識とは対極に、着装規範の研究において牛田・高木・神山・阿部・辻（2001）は、公的自意識・私的自意識が高い者は従来の着装を重視したのに対し、自尊心や独自性の高い者は逆に新たな着装を重視していることを明らかにした。これらの知見より「同調欲求」には、一見おしゃれをしたい欲求があっても無難な形で流行に乗ることで周囲と似た装着をするあり方と、他者の目を意識して目立たないよう周囲と似た装着をするあり方の二種類が存在する、と考えた。本研究では、周囲から浮かないよう無難な被服を選択するあり方を「消極的同調志向」、流行を意識して安心を得ようとするあり方を「積極的同調志向」と名づけることとする。

以上のように、被服志向性において、差異化として単一の「差異化志向」因子を、同調として「消極的同調志向」と「積極的同調志向」という二面性を持った2つの因子を想定し、被服志向性に関する尺度を作成することを一つの目的とする。

3. 青年期における孤独感が被服志向性に及ぼす影響

心理療法の過程で、他者との関わりが薄く強い孤独感を抱いていた長期不登校の思春期女子クライアントが、「外出すると、まるで自分が裸で歩いているみたいです」と話したことがある。自分という存在が何者にも守られず丸出しになっている体験が、被服という喩えを用いて象徴的に語られたといえよう。被服によって他者に呈示する自己像の操作や、自己像の確認、強化（神山，1996）ができなければ、その心理社会的意味を失ってしまう。青年期に一個の人間として心理的に自立していく上で、多かれ少なかれ、孤独感を抱く体験を避けては通れない。冒頭に挙げた制服がなくなって戸惑いを覚える事例の背後

にも、孤独感のテーマは潜在していると推察される。このように見ていくと、他者からの孤立感、孤独感という要素が被服志向性に与える影響は大いにある、と考えられる。

孤独感は、対人行動の特徴（工藤・西川1983, 諸井1995他）や精神的健康（牧野, 2013他）との関連で検討されているが、被服心理学の分野では着装規範と自尊心との関連の研究は見られるものの、孤独感との関連でなされた研究は見られない。着装行動が集団への適応行動（雪村・今岡, 2002）とするならば、青年が集団適応を実現する上で、孤独感とどう折り合いをつけるかという課題は、被服志向性のありようと密接に関連があると考え、本研究では孤独感をとりあげることとした。諸井（1995）によれば、孤独感は、低い自尊心、高い不安、自己の社会的技能に関する低い評価、というネガティブな自己認知を形成する。社会的ネットワークの形成や他者との親密な交流の基礎となる自己開示についても、孤独者は自己の内面を開示することに躊躇するという重要な特徴を示す（諸井, 1995）。藤原（1982）によれば、高い自尊感情を持つ女子大生は個性を強調する被服の用い方をし、自尊感情の低い人は社会的受容、慎み深さを重視した被服行動をとる傾向がある。牛田・高木・神山・阿部・福岡（1998）もまた、自尊心の高い若い女性は場面にかかわらず「個性・流行」の基準を重視することを明らかにしている。孤独感が強い者は、自尊心が低く自己開示も躊躇するため、慎み深さを重視した服装、すなわち本研究で命名した「消極的同調志向」が高くなり、逆に「積極的同調志向」は低くなる、と考えた。

4. 青年期における独自性欲求が被服志向性に及ぼす影響

Snyder, C. R. & Fromkin, H. L. (1980) は、人には生まれながらにして他人と異なるアイデンティティをもちたいという欲求が備わっており、この欲求が我々の生活において基本となる社会的欲求であると考えた。独自性欲求は、被服行動との関連性が高い個人内要因として多くの研究がなされている。例えば藤原・藤田・山本（1989）において、独自性欲求の強い者ほど社会における服装規範からの逸脱の程度が大きいことや、いわゆる個性的な服装や、流行の被服を他者より早く採用することが明らかにされている。

藤原ら（1989）が、30代～50代の女性よりも女子短大生の独自性欲求のほうが高いことを明らかにしているように、アイデンティティ確立の時期にある青年期において独自性欲求の達成も重要な課題である。そのため、青年期に焦点を当てた本研究では、孤独感とともに独自性欲求をとりあげることとした。独自性欲求の強い者は、被服志向性においても自分らしさをアピールするために「差異化志向」が高くなり、流行をいち早く取り入れる傾向も見られると推察されることから、「積極的同調志向」も高くなる、と考えた。

II. 仮説

仮説は、以下の3つを立てた。

仮説1 被服志向性の「同調欲求と差異化欲求（雪村・今岡, 2002）」に焦点化すると、同調欲求については、周囲から浮かないよう無難な被服を選択する「消極的同調志向」と、流行を意識して安心を得ようとする「積極的同調志向」が、差異化欲求としては、人目をひき他との差異化を見出そうとする「差異化志向」が想定されるだろう。

仮説2 孤独感が強い者は、自分を他者に呈示することが難しいと考えられる。そのた

め、被服志向性においては周囲を意識し、「消極的同調志向」が高くなるであろう。しかし、流行を意識した「積極的同調志向」は低くなるであろう。

仮説3 独自性欲求が強い者は、個性的な被服を選択するなど純粹に被服に関心があると考えられる。そのため、被服志向性においては「差異化志向」が高くなるであろう。また、流行を即取り入れることは自分らしさのアピールにつながると考えられるため、流行を意識した「積極的同調志向」が高くなるであろう。

なお、仮説1～3の他に、孤独感と独自性欲求の交互作用についても探索的に検討する。

Ⅲ. 方法

1. **調査対象者**：A大学に所属する女子大学生124名（18～41歳）に調査を実施し、有効回答数は110名（有効回答率89%）であった。平均年齢は18.60歳（SD=2.235）であった。

2. **日時・手続き**：2013年7月に筆者の担当する講義時間を利用し、集団法にて実施した。

3. 測定尺度

① 被服志向性尺度

「同調欲求と差異化欲求（雪村・今岡，2002）」という概念を参考に、かつ同調欲求には二面性があると考え、仮説1で述べたように「消極的同調志向」「積極的同調志向」「差異化志向」の3因子を想定した。項目の選出にあたっては、藤原（1986）が作成した「被服の関心度尺度」から11項目、神山・高木（1996）が作成した「流行志向性評定項目」から20項目、藤木（1998）の用いた「流行に対する意識や態度に関する質問項目」から5項目の、計36項目をとりあげ、文頭や文末を統一するために変更を加え、内容については現代の実情に合うよう表現を改めて使用した。下位尺度の内訳の想定は表1の因子分析の結果中に示した。「非常にあてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「ややあてはまらない」「まったく当てはまらない」の5件法。

② 改訂版UCLA孤独感尺度日本版（諸井，1991）

Russell et al.（1980）によって作成された改訂版UCLA孤独感尺度の邦訳で、20項目からなる。「けっして感じない」、「どちらかと言えば感じない」「どちらかと言えば感じる」「たびたび感じる」の4件法。

③ ユニークネス尺度（山岡，1993）

Snyder, C. R. & Fromkin, H. L.（1977）の概念的定義に基づいて作成された。24項目からなる。「非常にあてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「ややあてはまらない」「全くあてはまらない」の5件法。

Ⅳ. 結果

1. 各尺度の分析

1-1. 被服志向性尺度の分析

被服志向性尺度36項目について、仮説に基づき、3因子を固定数とし、主因子法・Promax回転による因子分析を行なった。因子負荷量が.35に満たない項目は削除した。他の因子に.35以上の負荷量を持つ項目が2項目見られたが、いずれも第1因子に.491と.447

と高い負荷量を示しており、第2因子には $-.352$ と $-.373$ と、削除基準値より少し高い因子負荷量であったため、項目の削除は行わず、因子負荷量の高い方の因子で採用した。

第Ⅰ因子は、「流行に遅れないようにしている」「周囲の人が身に着けている服装に興味があり、かつ気になる」など13項目で構成され、周囲の人の服装や流行を意識して被服を選択しようとするあり方に関する項目が高い負荷量を示し、「積極的同調」因子と命名した。第Ⅱ因子は「買い物するときは個性的な店を選んでいる」「珍しい服でないと買う気がしない」など8項目で構成され、被服で個性を表現しようとするあり方に関する項目が高い負荷量を示し、「差異化志向」因子と命名した。第Ⅲ因子は、「自分に似合いそうにない服でも、多くの仲間が着ているタイプの服であれば、それを着用する」「人が大勢いる場では、自分の服が仲間ときている服と同じようなものでないと何となく不安になる」など7項目で構成され、周囲から浮かないよう被服を合わせようとするあり方に関する項目が高い負荷量を示し、「消極的同調性」因子と命名した。

以上27項目を最終的な被服志向性尺度として採用し、以下の分析に用いた。うち、項目12と項目28の2項目が負の因子負荷量を取り、想定していた下位尺度と意味的に逆の因子に含まれたことが要因と考えられたため、この2項目について得点を逆転させる再計算を行なった上で α 係数を算出した。被服志向性尺度の因子分析結果および α 係数を表1に示す。いずれも高い α 値が得られた。

被服志向性尺度の下位尺度の平均値と標準偏差は表2の通りであった。

1-2. 孤独感尺度およびユニークネス尺度の分析

孤独感尺度とユニークネス尺度の平均値と標準偏差および α 係数は表3の通りであった。

2. 各尺度間の相関係数の算出

被服志向性尺度の下位尺度、孤独感尺度、および、ユニークネス尺度の間の相関関係を検討するために、ピアソンの積率相関係数を算出した(表4)。

被服志向性尺度の尺度間については、「積極的同調志向」と「差異化志向」の間のみ、中程度の正の相関が見られた($r=.488$ $p<.01$)。被服志向性尺度と孤独感尺度の関連については、「積極的同調志向」と「孤独感」の間に中程度の正の相関($r=.314$ $p<.01$)が見られ、逆に「積極的同調志向」と「孤独感」の間には中程度の負の相関($r=-.408$ $p<.01$)が見られた。被服志向性尺度とユニークネス尺度の関連については、「消極的同調志向」と「ユニークネス」の間に中程度の負の相関($r=-.301$ $p<.01$)が見られ、逆に「積極的同調志向」と「ユニークネス」の間には弱い正の相関($r=.196$ $p<.05$)、「差異化志向」と「ユニークネス」の間には中程度の正の相関($r=.485$ $p<.01$)が見られた。

孤独感尺度とユニークネス尺度の間には、弱い負の相関($r=-.243$ $p<.05$)が見られた。

3. 孤独感および独自性欲求が被服志向性に及ぼす影響の検討

孤独感の程度、独自性欲求の程度の両者が、被服志向性にどのような影響を及ぼすかを検討するために、孤独感得点およびユニークネス尺度得点の中央値(順に1.950, 2.875)を基準にそれぞれ高い群と低い群に分けた(以下、H群、L群とする)。そして、被服志向性尺度の3つの下位尺度得点について、「孤独感(H, L)×「ユニークネス(H, L)」の

表1 被服志向性尺度の因子分析結果 (Promax回転後の因子パターン)

	項目 (括弧内は想定した概念)	I	II	III
積極的同調志向 13項目 $\alpha = 0.804$	14. どんなファッションが流行しているか関心がない。(*) (積極的同調志向)	.756	-.068	.041
	30. テレビコマーシャルや広告に登場する人が身につけている服装に興味があり, かつ気になる。(積極的同調志向)	.637	.229	-.038
	18. 流行に遅れないようにしている。(積極的同調志向)	.625	-.153	.321
	17. 周囲の人が身につけている服装に興味があり, かつ気になる。(消極的同調志向)	.606	-.073	.017
	21. 仲間からほめられ, また, うらやまれるような服装をしたい。(差異化志向)	.587	.180	.077
	36. 着飾るのが好きである。(差異化志向)	.568	.235	-.186
	34. 過去3ヶ月間, 誰かと何か新しいファッションの話をした。(積極的同調志向)	.524	.004	-.109
	29. 新聞や雑誌のファッションに関する記事を読む。(積極的同調志向)	.522	.266	-.050
	33. 現在流行している服は着ないようにしている。(*) (積極的同調志向)	.491	-.352	-.135
	2. シーズンに先立って着る服をあれこれ考えることはない。(積極的同調志向)	.444	.008	.191
	31. 街へ出て新しいファッションを探すことはあまりない。(*) (差異化志向)	.439	.123	-.001
	7. 自分の服装を非難されてもほとんど気にならない。(差異化志向)	-.422	.302	-.198
	26. 服を選ぶときには以前の自分のスタイルにこだわる。(消極的同調志向)	.362	-.108	.051
削除項目	27. 人の服をみて「やほったい」と思うことがある。(積極的同調志向)	.343	.174	-.050
	35. アクセサリーやスカーフなどの付属品をよく身につける。(差異化志向)	.342	.281	-.087
	5. ファッションショーを見に行くことはない。(*) (積極的同調志向)	.237	.103	.218
	15. ファッション性の高い衣服は, すぐ流行遅れになって着られなくなるのであまり買わない。(消極的同調志向)	-.127	.001	-.034
差異化志向 8項目 $\alpha = 0.832$	6. 買い物するときは個性的な店を選んでいる。(差異化志向)	-.272	.894	.116
	32. 珍しい服でないと買う気がしない。(差異化志向)	-.216	.772	.345
	12. 斬新なデザインの服を買うことにためらいを感じる。(消極的同調志向)	.051	-.719	.006
	1. 私は仲間の中では目立つ衣服を着るのが好きだ。(差異化志向)	.021	.679	-.040
	23. 服装によって人目を引きたい。(差異化志向)	.302	.499	.030
	10. 自分なりの個性を持って衣服を着ている。(差異化志向)	.099	.447	-.373
	4. 新しいスタイルの服を仲間よりも先に着たい。(積極的同調志向)	.253	.412	.119
	9. たえず新しい着こなしを考えている。(積極的同調志向)	.330	.371	-.210
削除項目	8. 私の服装を真似する人がいるとうれしい。(差異化志向)	.109	.175	-.080

青年期女子の孤独感および独自性欲求が被服志向性に及ぼす影響

消極的同調志向 7項目 $\alpha = 0.747$	19. 自分に似合いそうにない服でも、多くの仲間が着ているタイプの服であれば、それを着用する。(消極的同調志向)	.100	.229	.758
	25. 人が大勢いる場では、自分の服が仲間の着ている服と同じようなものでないと何となく不安になる。(消極的同調志向)	.123	-.169	.630
	16. いつも人と同じ服装をするようにしている。(消極的同調志向)	-.021	-.027	.596
	13. 似合いそうになくても流行の服を着る。(消極的同調志向)	-.016	.217	.573
	11. 流行を取り入れると人と同じで安心できる。(消極的同調志向)	.394	-.055	.479
	28. 衣服は自分の個性を表すのに重要な1方法だ。(差異化志向)	.120	.210	-.439
	3. 友人が勧めても自分の気に入る服でなければ買わない。(*) (消極的同調志向)	-.018	-.035	.378
削除項目	24. 友人とショッピングに行ったとき、自分はあまり気がすまなくても友人が似合うと言ったらその衣服を買う。(消極的同調志向)	.053	.049	.339
	22. 前の年に来ていた服は着ない。(積極的同調志向)	.223	.048	.250
	20. 服の色に持ち物や靴の色を合わせるようにする。(差異化志向)	.075	.178	-.212
因子寄与	7.214	3.743	2.897	
累積寄与率	20.040	30.436	38.483	
因子間相関	I	II	III	
	I	-.412	-.054	
	II	-	-.060	
	III	-	-	

表2 被服志向性尺度の下位尺度の平均値と標準偏差

下位尺度名	平均	SD
消極的同調志向	2.020	0.629
積極的同調志向	3.120	0.694
差異化志向	2.430	0.811

表3 孤独感尺度およびユニークネス尺度の平均値と標準偏差および α 係数

尺度名	平均	SD	α 係数
孤独感尺度	2.032	0.439	0.858
ユニークネス尺度	3.000	0.515	0.843

表4 各尺度間の相関係数

	被服志向性尺度			孤独感尺度	ユニークネス尺度
	消極的同調志向	積極的同調志向	差異化志向	孤独感	ユニークネス
消極的同調志向	-	.047	-.041	.314 **	-.301 **
積極的同調志向		-	.488 **	-.408 **	.196 *
差異化志向			-	-.120	.485 **
孤独感				-	-.243 *
ユニークネス					-

* p<.05, ** p<.01

2要因分散分析を行なった(表5)。その結果, 被服志向性のうち「消極的同調志向」で, 有意傾向ではあるが交互作用が見られた ($F [1,106] = 5.306 p < .10$)。単純主効果の検定を行なった結果, ユニークネスにおける単純主効果が有意であり ($F [1,106] = 10.503 p < .01$), 独自性欲求が低い場合には孤独感の高低による「消極的同調志向」得点の差はなかったが, 独自性欲求が高い場合においては孤独感L群がH群に比べて有意に「消極的同調志向」得点が低くなっていた(図1)。

被服志向性の「積極的同調志向」では孤独感の主効果のみ有意であり ($F [1,106] = 10.592 p < .01$), 孤独感H群はL群に比べて有意に「積極的同調志向」得点が低かった。「差異化志向」では「ユニークネス」の主効果のみ有意であり ($F [1,106] = 11.490 p < .10$), ユニークネスH群はL群に比べて有意に「差異化志向」得点が高かった。

表5 孤独感とユニークネスの高低による被服志向性尺度の各得点と分散分析結果

孤独感 ユニークネス	L群		H群		主効果		
	L群	H群	L群	H群	孤独感	ユニークネス	交互作用
消極的同調	2.095 (0.121)	1.680 (0.104)	2.183 (0.105)	2.218 (0.130)	7.341**	2.720	3.80 +
積極的同調	3.295 (0.136)	3.352 (0.116)	2.882 (0.118)	2.919 (0.146)	10.592**	0.132	0.006
差異化傾向	2.068 (0.158)	2.788 (0.134)	2.258 (0.136)	2.554 (0.168)	0.022	11.490**	2.005

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01

V. 考察

新たに作成した被服志向性尺度は, 想定した下位尺度間の項目移動が若干見られたものの, ほほ仮説通りの因子が見出されたことから, 仮説1は支持されたと言えよう。ここでは仮説2と仮説3および, 探索的検討事項であった交互作用の検証を中心に考察を進める。

1. 孤独感が被服志向性に及ぼす影響をめぐって—仮説2の検討

仮説2は, 孤独感が強い者は「消極的同調志向」が高く, 「積極的同調志向」が低い, というものであった。相関分析より, 「孤独感」と「消極的同調志向」の間に正の, 「孤独感」と「積極的同調志向」の間の負の, いずれも中程度の相関が見られ, 因果関係までは

青年期女子の孤独感および独自性欲求が被服志向性に及ぼす影響

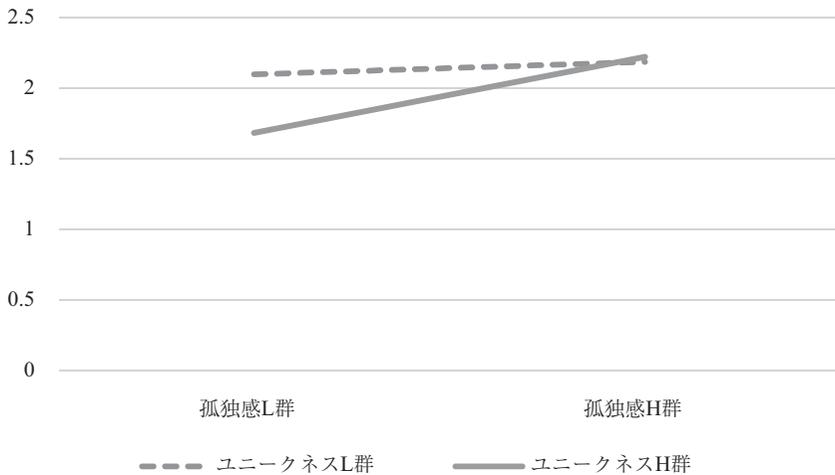


図1 被服志向性の「消極的同調」得点における交互作用の有意傾向

言えないが、いずれにも関連性があることが明らかとなった。これは仮説に矛盾しない結果である。また、分散分析の結果、「孤独感」が高い者の方が「積極的同調志向」が低いことが明らかとなり、孤独感が強いと流行に乗ることに躊躇したり、流行のファッションに身を包む自己像が見出しにくかったりする可能性が示唆された。

「消極的同調志向」には「孤独感」のみが影響を及ぼすと想定していたが、有意傾向ではあるが「孤独感」と「独自性（ユニークネス）」の交互作用が見られた。この結果から、独自性欲求が低い場合には、孤独感の程度が「消極的同調志向」に及ぼす影響に差は見られないのに対して、独自性欲求が高い場合においては、孤独感が弱いと「消極的同調志向」も弱まることが明らかとなった。すなわち、持ち前の独自性欲求が強い青年期女子が着装において独自性を発揮する際に、孤独感が弱い場合には独自性をうまく発揮しやすいのに対し、孤独感が強い場合には、消極的、抑制的な着装を選択する傾向がある、という興味深い知見が得られた。強い孤独感は、少なくとも被服行動の側面に関しては自分らしさ発揮の妨げになる可能性が示唆されたのである。

これらより、仮説2は、交互作用の有意傾向の結果と合わせると、やや複雑化した形ではあるが、支持されたと言える。そしてここから、孤独感が強い青年期女子で、特にその中でも独自性欲求が強い者への対応を考える必要性が見出された。自己開示と孤独の関連を検討した研究において野口（2011）は、ネット自己開示満足度が高くても対面自己開示満足度が低いと孤独感が高まることを明らかにし、ネット自己開示のみ満足している人はネット上で自分らしさを発揮できるため対面場面を避けがちとなり、ひきこもり予備軍の可能性があると指摘した。被服行動とはまさに対面での自己像の操作である。土肥（2001）は、「被服志向性や被服行動は、自己意識の高まりや自己概念形成の結果として存在するだけに限らず、その逆の関係、すなわち「とりあえず被服志向性の高まりが先行し、それを実現する形で被服行動をし、その結果として、自己意識や自己概念が生まれる」という因果関係も考えられる、と示唆する。土肥のモデルに従えば、被服志向性や被服行動の変容が、自己概念の変化にも寄与する可能性がある。衣服は「ペルソナを現す典型的

なイメージのひとつ」であり、「個人の側からの要請・自己表現欲求といったものと社会・状況からの要請・期待との間（大場，2000）」をつなぐ。青年期の被服行動を広義にペルソナ形成の試みと捉え、例えば自己像や対人関係満足度、被服満足度と孤独感の程度の関連を調査し、どのような関わりが可能かを探ることも今後の課題となるであろう。

2. 独自性が被服志向性に及ぼす影響をめぐって—仮説3の検討

仮説3は、独自性欲求が強い者は「差異化志向」と「積極的同調志向」が高くなる、というものであった。相関分析より、「ユニークネス」と「差異化志向」の間の中程度の正の相関、「ユニークネス」と「積極的同調志向」との間の弱い正の相関がみられ、因果関係までは明らかにできないが関連性があることが判明し、仮説に矛盾しない結果であった。分散分析から、「ユニークネス」が高い者は「差異化志向」が高いことが明らかとなった。これらの結果は藤原ら（1989）とも一致する。ただし本研究では、「積極的同調志向」に「ユニークネス」が及ぼす影響は見られず、仮説3は一部のみ支持される結果となった。

この結果について2つの要因が考えられる。第一に、今回用いたユニークネス尺度は“自尊心と関連したポジティブな面での他者との差異への欲求を強く持つ者”というSnyderらの定義に立脚しており、また「積極的同調志向」に影響せず「差異化志向」のみに影響を及ぼしたという本研究の分析結果から考えると、次のように推察される。すなわち、岡本（1985）の尺度で測定された独自性欲求が、他者を意識しつつも前向きに自分らしさを打ち出そうとする傾向の方が重視されていたために、差異を示す「差異化傾向」への因果関係は示されたが、同調を示す「積極的同調志向」への因果関係は示されなかったのではないかと考えた。第二に、性差の要因が考えられる。先述した通り、女性は男性よりファッション採用において差異化欲求の強さが影響する（雪村・今岡，2002）。「積極的同調志向女性」とは、流行に乗っておしゃれはするが他との差異化まではいかない、あくまで同調性の高いファッション志向である。独自性欲求の強い青年期女子のファッションとは、「積極的同調志向」よりも「差異化志向」にあるということが、本研究で明らかにされた。

近藤・宇野・中川（2006）は独自性欲求を2次元から4タイプに類型化し、身体装飾行為との関連を検討した結果、他者の存在を気にする「抑圧型」と「自己顕示型」の2タイプで流行を意識した同調化傾向が見られ、その中でも自分を積極的に表出するタイプである「自己顕示型」で変身願望やファッションリーダーへの同一化傾向が見られたことを明らかにした。本研究では次元性の高い尺度（岡本，1985）を用いたが、独自性欲求の質的再検討を経て類型化による被服志向性の比較をすることも課題となるであろう。また、橋本・内藤（2009）は、大学1年生は個性など外見の魅力への関心が高く、4年生は快さなど社会適応を考慮する傾向といった学年差があることを検証した。大学生の場合、就職活動が近づくと被服志向性も変化すると考えられ、学年による比較検討も望まれる。

VI. まとめ

本研究では第一に、被服志向性を、自我同一性の確立を目指す上での同調と差異化の欲求のせめぎ合いの表現と捉え、同調の二面性に注目して被服志向性尺度を作成し、尺度の

検討を行い、仮説1は支持された。第二に、この尺度を用いて、青年期女子を対象に、孤独感と独自性欲求が被服志向性に及ぼす影響を検討した結果、孤独感が強い女性は流行に乗ることに躊躇する傾向が見られた。また、孤独感が強い上に独自性欲求も高い女性は消極的な着装を選択する傾向があることが明らかになり、仮説2は複雑化された形ではあるが支持され、孤独感が強く独自性欲求が強い青年期女子への対応を考える必要性についても考察された。第三に、独自性欲求が高い女性は他者との差異化を求める着装を選択する傾向が明らかとなったが、流行を追う着装への影響は見られず、これらは仮説3を一部支持する結果であった。独自性欲求の尺度の質や性差が影響した可能性について考察された。

〈付記〉 本研究は、結城希美（心理学科平成25年度卒業）の卒論データに基づき、筆者が再分析し、内容を大幅に書き改めたものである。データの使用を快諾してくれた結城さんに感謝します。

引用文献

- 土肥伊都子（2001）：被服と自己の関係とジェンダー—「自己を飾る被服行動」から「自己を作る被服行動」へ—。繊維製品消費科学会誌，42(4)，212-217。
- Erikson, E. H. (1959): *Identity and life cycle*. New York: International Universities Press. 小此木啓吾訳（1973）：自我同一性。誠信書房。
- 橋本令子・内藤章江（2009）：現代の女子学生にみる自己概念と被服行動との関係。椋山女学園大学研究論集，40，135-145。
- 藤木悦子（1998）：女子学生の自己イメージと流行採用との関連性。福岡女子短大紀要，55，63-71。
- 藤原康晴（1982）：女子大生の被服の関心度と自尊感情との関係。日本家政学雑誌33(10)，36-40。
- 藤原康晴（1986）：女子大生の被服の関心度と自己概念および自尊感情との関係。日本家政学雑誌，37(6)，493-499。
- 藤原康晴・藤田公子・山本昌子（1989）：女子学生および中年女性の服装に関する規範意識と独自性欲求との関連性。日本家政学会誌 40(2)，137-143。
- 近藤信子・宇野保子・中川早苗（2006）：身体装飾について：第2報 独自性欲求との関連。中国学園紀要，5，9-14。
- 神山進（1996）：被服心理学の動向。高木修監修，被服行動の社会心理学。北大路書房，2-24。
- 神山進・高木修（1996）：ファッション・リスクの知覚と独自性欲求。日本衣服学会誌，39(2)，101-112。
- 川本勝（1981）：流行の社会心理。勁草書房。
- 工藤力・西川正之（1983）：孤独感に関する研究（I）—孤独感の信頼性・妥当性の検討。実験社会心理学研究，22，99-108。
- 牧野幸志（2013）：青年期におけるコミュニケーション・スキルと精神的健康—同性・異性友人に対するコミュニケーション・スキルと精神的健康との関連—。摂南大学経営情報学部論集 20(2)，35-47。
- 諸井克英（1991）：改訂UCLA孤独感尺度の次元性の検討。静岡大学文学部人文論集，42，23-51。

- 諸井克英 (1995) : 孤独感に関する社会心理学的研究—原因帰属および対処方略との関係を中心として—. 風間書房.
- 野口恵美 (2011) : 大学生の自己開示満足感とインターネット上の自己開示特徴および孤独感との関連. 九州大学心理学研究, 12, 121-128.
- 大場登 (2000) : ユングの「ペルソナ」再考—心理療法的接近. 創元社.
- Rusell, D., Peplau, L. A., & Cutrona, C. E. (1980): The revised UCLA Loneliness Scale: Concurrent and discriminant validity evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 472-480.
- Simmel, G. 著 (1904) 円子修平訳 (1976) : ジンメル著作集7—文化の哲学. 白水社.
- Snyder, C. R. & Fromkin, H. L. (1977): Abnormality as a positive characteristic: The development and validation of a scale measuring need for uniqueness. *Journal of abnormal Psychology*, 86, 518-527.
- Snyder, C. R. & Fromkin, H. L. (1980): Uniqueness—The human pursuit of difference. New York: Plenum Press.
- 山岡重行 (1993) : ユニークネス尺度の作成と信頼性・妥当性の検討. 社会心理学研究, 9(3), 181-194.
- 牛田聡子・高木修・神山進・阿部久美子・福岡欣治 (1998) : 着装規範に関する研究 (第2報)—場面と基準の関連性を規定する個人差要因—. 繊維製品消費学会誌, 39(11), 49-55.
- 牛田聡子 (1999) : 被服による着装感情と自己の変容. 高木修監修. 被服と化粧の社会心理学. 北大路書房, 52-76.
- 牛田聡子・高木修・神山進・阿部久美子・辻幸恵 (2001) : 着装規範に関する研究 (第8報)—着装規範同調・逸脱がもたらす着装感情を規定する個人差要因 (自意識・自尊心・独自性欲求)—. 繊維製品消費学会誌, 42(11), 35-42.
- 雪村まゆみ・今岡春樹 (2002) : 同調欲求, 差異化欲求がファッション採用に及ぼす影響. 繊維製品消費学会誌, 43, 33-39.